

イエスのことば 第 71 回 十人のツァラアト患者のきよめ

ある村に入ると、ツァラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。(ルカ 17 : 12~14)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯 3 年半。起承転結の四部構成に分け、時間順でイエスのことばを学ぶ
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から、翌 27 年春のメシア宣言を経て、宣教開始まで
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける
 - (3) 転：紀元 29 年春から約 1 年、弟子訓練の時期
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月、エルサレム入城・十字架・復活、復活から 40 日後に昇天
2. 転の部
 - (1) 紀元 29 年春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行。目的は休息と弟子訓練
 - (2) 秋 10 月の仮庵の祭りから、冬 12 月の宮清めの祭りまでの約 3 か月
 - (3) 翌年 4 月 1 日までの約 3 か月・・・記事は、全部で 15
3. 前回は、15 のうちの 7 番目の記事、**【ラザロのよみがえり】** (ヨハネ 11 章)
 - (1) イエスが、急な病で死んだラザロを死後 4 日目に生き返らせた。
 - (2) この奇跡は、承の部の結末でイエスが予告していた「ヨナのしるし」・・・死んでから 3~4 日での復活を指す。預言者ヨナは海で水死して、その体は大魚に呑み込まれたが、三日後によみがえって陸地に立ち、アッシリアの都ニネベに行って預言の使命を果たした (ヨナ 1 : 17~3 : 5)。ヨナの復活は、普通の体へのよみがえり。
 - (3) ラザロのよみがえりを見た多くの人々がイエスをメシアであると信じ、またその評判が広まった。しかしユダヤ議会はこの奇跡を無視し、イエス殺害を計画した。その計画の提案者は、ユダヤ議会の議長、大祭司カヤパであった。
4. 今回は、8 番目の記事。大祭司カヤパに向けた奇跡「十人のツァラアト患者のきよめ」と神の国到来についての教えである。

□アウトライン 十人のツァラアト患者のきよめ

- A. 北上してサマリアとガリラヤの境へ (ヨハネ 11 : 54、ルカ 17 : 11~12)
- B. 十人のツァラアト患者のきよめ (ルカ 17 : 13~19)
- C. 神の国はいつ来るのか (ルカ 17 : 20~21)
- D. 人の子が現れる日=イエスが 2 回目に来るとき (ルカ 17 : 22~37)

A. 北上してサマリアとガリラヤの境へ

(ヨハネ 11 : 54、ルカ 17 : 11~12)

1. イエスは、ラザロをよみがえらせた後、ユダヤ議会の管轄区域外に退避した。

ヨハネ 11 : 54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフラ임という町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。

2. エフラ임から北上し、サマリアとガリラヤの境へ移動した。そこには 10 人のツァラアト患者がいた。一人はサマリア人、あとの 9 人はユダヤ人。

ルカ 17 : 11~12 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。ある村に入ると、ツァラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、

B. 十人のツァラアト患者のきよめ

(ルカ 17 : 13~19)

1. 十人の求めとイエスの応答

ルカ 17 : 13~14a 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」

- イエスはすぐに彼らを癒やしたわけではない。指示した時点では何も症状は変わらないが、彼らに祭司に見てもらうように指示した。ツァラアト患者について治癒しているかどうか判定するのは、モーセの律法では、祭司と定められていた。

2. 十人はイエスの指示に従って、エルサレムへ向かった。すると、彼らは行く途中でツァラアトに冒されていた患部がきれいに消えて、癒やされ、きよめられたことがわかった。十人のうちの一人は、イエスのもとに引き返して来て感謝を表した。

ルカ 17 : 14b~16 すると彼らは行く途中できよめられた。そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かったと、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。

- 十人がイエスの指示に従って、エルサレムに向かったということは、彼らがイエスをメシアとして認め、自分たちを癒やし、きよめる力がイエスにあると信

じたからである。

3. 戻ってきた一人のサマリア人に対して、イエスは救いを宣言した。

ルカ 17: 17～19 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」

それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」

- 立ち上がって行きなさい・・・祭司に見せなさいと改めて指示した。この人はサマリア人であったが、サマリアの祭司のもとではなく、他の 9 人とともにエルサレムに行った。そのことは、彼がもはやサマリア独自のモーセ五書に基づく祭儀には従わず、イエスを救い主として信じ、イスラエルの神を真の神として認めたということである。

4. 記事にはないが、10 人が大祭司カヤパの前に立ち、モーセの律法の規定に従って、ツァラアト患者が癒され清められたことを確認する手続きが進められたことは明らかである。イエスが前にツァラアト患者を癒やしたときは一人であったが、今回はその 10 倍である。カヤパのもとで多くの祭司たちが 10 人のための手続きに関与し、カヤパは 10 人のツァラアト患者が癒やされたことを公式に宣言しなければならなかった。

- (1) モーセの律法に従っての確認手続き・・・レビ記 14 章、ツァラアト患者が治ったと判定するのは祭司。判定が出るまでは、家族や友人のもとに行ってはならない。

判定のためには、祭司は 7 日間にわたる厳重な調査と診断をしなければならない。①その人が本当にツァラアト患者だったのかという調査、②その人は本当に治ったのかという診断、③治癒に至った経緯や誰がどのようなことをしたのか、それは適正な方法だったのかなどの調査、の 3 点である。

7 日間の調査により祭司が治癒を認めたときは、8 日目に律法の定める 4 種類のささげ物をする。これで、その人は家に帰ることができる。(参照、メシアの生涯ハイライト第 5 回、2024 年 8 月 25 日)

- (2) 大祭司カヤパは、10 人の人々について、一人ひとり、次のような公式宣言を神殿にて行わねばならなかった。

- ① その人は、確かにツァラアトに冒されていた。
- ② その人は、今はツァラアトが治り、完全にきよい。
- ③ その人が治ったのは、ナザレ人イエスによる。その人がイエスに助けを求め、イエスが祭司に見せるよう指示したので、そのことばにしたがってエルサレムに向かったところ、その途中で治った。

C. 神の国はいつ来るのか

(ルカ 17 : 20～21)

1. サマリアとガリラヤの境という場所にもかかわらず、ユダヤ議会が派遣している監視団はここにも来ていた。監視団を構成するのは、ユダヤ教パリサイ派の指導者たち（パリサイ人たち）であった。彼らは、イエスが宣教を開始するときに、「**時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい**」（マルコ 1 : 15）と人々に言ったことを覚えていて、「神の国はいつ来るのか」とイエスに質問した。それに対してイエスは、「神の国は目に見える形で来るものではなく、すでに始まっていて、あなたがたはその中にいる」と答えた。

ルカ 17 : 20～21 パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。**神の国はあなたがたのただ中にあるのです。**」

2. 神の国について

- (1) イエスが宣教開始のときに人々に言った「神の国」は、メシアの王国である。しかし、指導者層の拒否により、メシアの王国は将来の世代へと先送りとなった。
- (2) この学びの区分で言うと、「承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける」の部、その結末で、イエスは指導者層から拒否を受けた。そのときから、「奥義としての神の国」の時代が始まった。「奥義」とは、旧約聖書では明らかにされず、新約聖書で明らかにされたことである。旧約聖書ではメシアが 2 回来ることは預言されていたが、1 回目と 2 回目の間に「奥義としての神の国」の時代があることは啓示されていなかった。
- (3) 「奥義としての神の国」の時代的特徴は、次の 3 点
 - ① 特定の国や地域ではない。全世界に目に見えない神の国が広がっていく。
 - ② 広がるために福音の種まきがなされる。悪魔もまた偽の教えの種まきをする。
 - ③ 神の国は大きく成長するが偽物も混じる。真の信仰者と偽者が混じっている。
- (4) パリサイ人たちの質問は、「神の国はいつ来るのか」、これは、メシアの王国はいつ来るのか、であった。それに対して、イエスが「目に見える形で来るものではありません」と言った神の国とは、「奥義としての神の国」である。すでに始まっていて、パリサイ人たちもその中にいる、とイエスは教えた。

注意：「あなたがたの心の中にある」ではない。**あなたがたのまわりには、目には見えない「奥義としての神の国」が、すでに始まっている**、ということ。

D. 人の子が現れる日＝イエスが 2 回目に来るとき

(ルカ 17 : 22～37)

1. パリサイ人たちに答えたあと、イエスは弟子たちには、メシアの王国がどのように来るのかについて詳しく教えた。

まず、「人の子の日」について。これはメシアが地上に現れている時期である。

紀元前 6 年か 7 年頃、イエスはベツレヘムでひっそりと生まれた。誕生のときに天使たちからその知らせを受けたのは、野で羊の群れの番をしていた羊飼いたちだけであった。

以来、紀元 30 年に至るまで、「人の子の日」が続いてきた。しかし、近いうちにイエスは、この地上からいなくなる。

ルカ 17 : 22 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。

2. イエスが 2 回目に来るときは、1 回目のような「ひっそりと」ではない。世界中の誰もが見ることのできるような、明確で大きなしるしが天に現れる。

ルカ 17 : 23～24 人々は『見よ、あそこだ』とか、『見よ、ここだ』とか言いますが、行ってはいけません。追いかけてもいけません。人の子の日、人の子は、稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光ると、ちょうど同じようになります。

3. 2 回目に来る前に、まず、イエスは苦しみを受けなければならない

ルカ 17 : 25 しかし、まず人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければなりません。

4. 2 目にイエスが来るとき、地上にはノアの洪水やソドムの破壊と同じような、神のさばきがくだる。これは、大患難期である。人々が日常生活を送っているときに、突如、大患難期に入り、神のさばきが地上にくだる。イエスが 2 回目に来るのは、7 年間の大患難期の最後の日であるが、大患難期全体を「人の子の日」とか、「人の子が現れる日」と呼ぶ。なお、旧約聖書では、大患難期は「主の日」という用語で預言されていた。

ルカ 17 : 26～30 ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだしていましたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

また、ロトの日に起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

人の子が現れる日にも、同じことが起こります。

5. 大患難期においては、イスラエル人はどっちつかずの態度を取ることは許されない。イエスをメシアとして信じるか、信じないか、そしていのちを保つか、失うか、である。

ルカ 17:31~35 その日、屋上にいる人は、家に家財があっても、それを持ち出すために下に降りてはいけません。同じように、畑にいる人も戻ってはいけません。ロトの妻のことを思い出しなさい。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。同じところで白をひいている女が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。」

- 一人は取られ、もう一人は残されます・・・【はっきりと、どちらかに分けられて、どっちつかずの者はいない】という意味のフレーズ。さらに、【一方は取られて救いを受け、他方は残されてさばきを受ける】という意味も。

ここでは、取られる方は、大患難期の支配者（反キリスト）に従うことをよしとせず、山地（ボツラ、現代の地名ペトラ）へ逃げるイスラエル人。

残される方は、山地へ逃げずにエルサレムに残るイスラエル人。

（注意）マタイ 24:40~41 は同じフレーズを用いているが、教会の携挙。

6. 弟子たちは、イエスに、2 回目に来るのはどこですか、と尋ねる。

ルカ 17:37 弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言うと、イエスは彼らに言われた。「死体のあるところ、そこには禿鷹が集まります。」

- 「禿鷹」とは、反キリストが率いる軍勢。「死体」とは、ボツラに避難しているイスラエル民族。

禿鷹に覆われる死体のような、無力なイスラエル民族を救うために、イエスはボツラに再臨する。旧約聖書の預言によれば、ボツラに再臨したメシアは、反キリスト軍をエルサレム郊外まで押し戻し、そこで反キリスト軍は壊滅し、大患難期は終了する。